

目次

◇小説

おやすみ

麻績^{おみ}

1

夏

麻績

7

世界の終わり

麻績

10

霧の子

麻績

12

追憶の教会

零音^{れいん}

19

あとがき

あとがき

◇詩

四編

ふうせんと空

そらのおさんぽ

まっかっか

あき

蒼そう

あとがき

39

37

35

33

おやすみ

麻績おみ

天井から吊り下げられた小さな電球が、部屋の中央を弱々しく照らしている。

電球から放たれる光は部屋の四隅に影を作り、そこから無数の何者かが顔を覗かせていた。その視線の先には、なにかが横たわっている。そのなにかは、薄い金色の髪に青白い肌を持ち、白くゆったりした服を身に纏った、人間のような姿をしていた。

ふいに、人間のようなそれが目を覚ます。金糸に縁どられた瞼が開き、青い瞳が頭になった。寝ぼけ眼を起すように、人間のようなものは何度か瞬きをする。その度に細い睫毛がしやらしやらと音を立てた。

人間のようなものはむくりと上体を起こす。それから、緩慢な動作で首を動かした。ぼんやりした青い目が部屋を見回し、その瞳に捉えられたくない影の住民たちは、青い目が四隅を通るとざわざわと影の中に隠れてしまった。影の住民が隠れる音が聞こえてたのか、人間のようなものは部屋の一角をじっと見つめる。しかし、そのときには影の住民の姿はすっかり影の中に消えていて、彼の目にその黒々とした姿がうつることはなかった。人間のようなものは首を傾げながら、彼の正面にある扉に目を向けた。

扉は木目が綺麗きれいな木製で、鈍く光るノブが付いている以外は特に模様もない、至ってシンプルないな出で立ちたちをしていた。扉を見た瞬間に、彼の耳に、誰かが彼を呼ぶ声が届いた。

人間のようなものは引かれるようにして扉の前に立った。人間のようなものがノブを握ると、カチャンと軽快な音がして鍵の開く感覚が手に伝わる。まるで、外へ出なさい、と言われているかのようなのだ。そう彼は感じた。

ノブは、捻ひねるとするりと滑るように回った。ノブを押せば、扉が何の抵抗もなく開く。彼は扉を開けることすらもどかしい様子で、少し出来た隙間から外へ出た。彼が開いた扉から出ていこうとするとき、影の中からは住民たちが再び頭を出してその様子を見ていた。彼はそれには気づかず、扉の向こうに行ってしまった。

扉はひとりでに、ボタンと音を立てて閉まった。

扉の先には、夜空が広がっていた。青と紫と濃紺の混ざり合う、美しい夜空が、上も下もなく一面にあった。人間のようなものが足元に視線を落とすと、歩いたあとから波紋が出来ている。水鏡になっているようだった。時折光が遠いところを流れていく以外は、星も月も見当たらないのに、周囲はよく見渡せる。白い服の裾をひらひらさせながら、人間のようなものは軽い足取りで歩を進めた。

しばらく行ったところで、人間のようなものは、前方に何かが見つけた。人間のようなものは、はたと立ち止まる。が、すぐにまた歩き始めた。

近づくにつれて、その容姿がはっきりとしてくる。そこに佇たたずむ何者かは、人間のようなものと同じくらしいの背格好をしていて、頭には下顎のない鹿の頭蓋骨のようなものを被っている。頭蓋骨はその顔の上半分だけを覆っていて、露出した口元には微かすかな笑みが浮かんでいた。

それは、彼がそれに話しかける前に声を掛けてきた。

「やあ、おやすみ」

掠かすれ声で寝る前の挨拶を述べられ、人間のようなものの顔に困惑が浮かぶ。佇たたずむ何者かは、人間のようなもの

の反応に首を傾げ、やがて合点がいったのか、アアと手を叩いた。

「おやすみって言うのが変なんだね？」

人間のようなものが頷くと、佇む何者かは「そうか、そうか」と繰り返した。

「でも、なにもおかしいことはないんだ。なんだって、きみはもう向こうでおやすみをして、ここにいるはずなんだから」

「……おやすみ？」

「そうさ。言ってしまうえば、きみはもう死んだんだよ。そして魂はばらばらになった。きみはその欠片のひとつだ」

佇む何者かは、そう言って人間のようなものを指さした。途端、人間のようなものの脳裏に、悲愴な表情を
した少年の姿が蘇る。少年はこの視覚の持ち主のほうに手を伸ばしていた。だが、その手が届いたか届かなかったのか、分からないまま映像は途切れた。視覚の主がここで「おやすみをした」らしいということは分かったが、
視覚の主が自分なのかどうかは、はつきりしなかった。

「何か思い出した？」

佇む何者かの声で、彼は意識を引き戻される。人間のようなものは知らずのうちに俯いていたことに気づき、
佇む何者かのほうを向く。佇む何者かは、先程と変わらない微笑のまま、彼をじっと見ていた。

「ぼ、ぼくは」

人間のようなものが何かを言いかけるのを、佇む何者かは手のひらで制した。

「なにも言わなくていいよ。口から出て行ったら大変だからね」

人間のようなものは慌てて口を噤んだ。佇む何者かは「ここでは、あまり必要以上に喋らないほうがいい」と
忠告した。

「喋ったことは、だいたい口から出てそこに残るんだ。そのまま忘れてしまったら、今のきみをつくっているものがなくなってしまう」

人間のようなものは、黙ったままでひとつ頷いた。それを見て佇む何者かはクスリと笑う。「全く喋ってはダメってわけではないよ」と言った。

佇む何者かは「さて」と手を打つと、くると人間のようなものに背を向ける。

何が始まるのかと、人間のようなものは佇む何者かの肩越しに向こうを見やる。そして、夜空の向こうから、だんだんとその姿を現す小舟を見た。こちらに接近する小舟を、佇む何者かが、どこからともなく取り出した櫂で引き寄せる。小さく水の流れる音がした。

「言い忘れてたけど、ぼくは渡し守っていうんだ。今から、きみを舟に乗せてあの世まで連れて行かなきゃならない」

言いながら先に舟に乗り込んだ渡し守が、人間のようなものを振り返る。渡し守は人間のようなものの前に手を差し出した。人間のようなものと同じくらい、小さな少年の手だ。人間のようなものは「うん」と返事をして、その手を取った。

人間のようなものが小舟に乗ると、渡し守はぐいと櫂を押した。小舟はゆつくりと動き出す。人間のようなものが振り返ったときには、先程まで立っていた場所は、夜空と溶け合って分からなくなっていた。

渡し守が櫂を押す度に、小舟の両側を流れる水が淡い光を放つ。夜光虫でもいるのだろうか、と人間のようなものはそれを眺めていた。随分と長いこと、彼はそうして水面から目を離さないでいた。

ふと、水面から夜空に視線をうつした人間のようなものが口を開く。

「あの光はなに？」

「光？」

渡し守が疑問形で返す。人間のようなのは夜空の遠いところを指して、

「たまにあそこを流れる、あの光。あれはなに？」

と訊き返した。渡し守は納得したように「あれか」と呟いた。

「あれは、魂だよ。あの世に行つたあと、もう一度現世で生きることになったときは、あの光になつてこの夜空を走らないといけないんだ。あんなふうだね」

渡し守が言い終わると同時に、光がまたひとつ夜空を走る。人間のようなのは、

「ぼくもそのうち、ああやつて夜空を駆けるのかな」

と光が走り去つた夜空を見上げた。

「そろそろ到着だよ」

渡し守の掠れ声に、人間のようなのは視線を上げる。渡し守は「降りる準備を」と微笑んだ。

岸や栈橋のようなものは、またしてもなかった。出発した場所と同じような夜空が広がるだけの空間に、渡し守は小舟をつけた。彼は櫂を操つて小舟が流されないように調節しつつ、人間のようなのに小舟から降りるように促す。

人間のようなのは言われた通りに夜空に一步踏み出した。

「ぼくの仕事はここまでだよ」

渡し守はそう言つて、ここから先のことについて簡単に説明をした。人間のようなのはそれにひとつひとつ相槌を打った。

全て話し終えた渡し守は、櫂を握り直した。

「それじゃあ、おやすみ。きみが夜空を駆けるまで」

去り際に手を振って、渡し守は櫂かいを押した。渡し守を乗せた小舟は、最初はゆっくりと、しかしだんだんと速度を上げて、ついには夜空に溶けて見えなくなった。人間のようなものはその背を見送ってから、渡し守の言っていた方向へ歩き出した。月も星もない夜空の中で、それでも彼の行先はよく見えた。

夏

麻績

「夏を捕まえたってホントですか」

訪れた人が、彼に問いかけた。

「ええ、そうです」

彼は、小さな窓の開いた扉を指した。扉は艶やかな木製で、真鍮製のノブがついている。扉の周囲だけ温度が少しだけ上がっているようで、駆け寄った訪問客の額や首筋に、じわりと汗が滲んだ。

「中を見ても？」

「構いませんよ、ぜひ」

訪問客は、その小窓を覗こうと扉の前で伸び上がった。背伸びをして覗き込んだそこから漏れ出す、むっとした熱い空気が訪問客の顔を撫でる。訪問客の目の前には、入道雲のわきあがる青空が広がっていた。青い空の足元には黒々としたアスファルトと乱立する建物の群れ。蒸れたアスファルトのにおいが鼻腔に入り込み、けたたましい蟬の聲が鼓膜を叩く。息の出来ないほどの夏が小窓から溢れ出して、訪問客の頭を包み込んだ。

「これは、真正正銘、夏、ですね」

小窓から離れた訪問客は彼のほうに向き直る。ふう、と息を吐き、額から目尻に伝った汗を拭いた。彼は「そうですね、夏ですよ」と返した。

訪問客は、もう一度だけ小窓を覗くと、

「では、これで。珍しいものを見せていただきました」

と会釈をした。彼は訪問客を出口のところまで送った。出口のところで訪問客は

「また来てもいいですか」

と彼に尋ねた。彼は、「もちろんですよ」と目を細めた。訪問客は彼に頭を下げ、駆け足で去っていた。

訪問客の背が見えなくなつたあとで、彼はふと首を傾げた。

「夏なんて、珍しいものでもないでしょうに」

不思議がる彼の背後にある窓の外には、雲ひとつない広い空が広がっていた。

「夏、まだいますか」

数週間後、あの訪問客が再び訪れて、開口一番彼に訊いた。彼は黙つたまま、首を振つた。訪問客が顔を曇らせる。

「夏、いないんですか」

「……夏は死にました。少し前に」

彼がそう言うのと、訪問客は悲しそうに顔を伏せた。そうですか、と一言呟いた。彼には、ずっと重たい空気が訪問客の肩を押し付けている想像が見えた。

「そんなに気を落とさないでください。夏はまた次の年に新しくやってきます。それより今度は秋を捕まえたんですよ、よければご覧になってください」

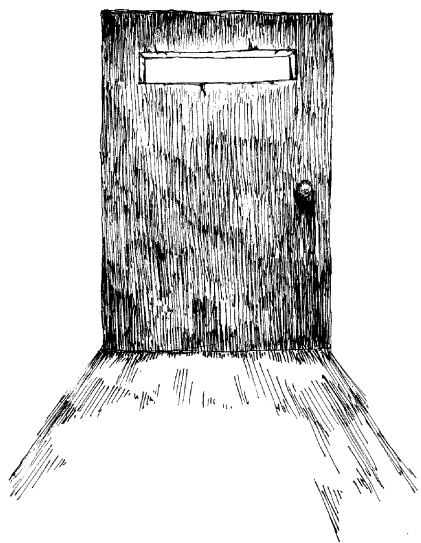
あまりの落ち込みようを見かねた彼は、訪問客に言葉を掛けた。訪問客は少し顔を上げ、

「ホントですか」

と言つた。訪問客の顔が、ほんのちよつと、明るくなる。彼は、出来るだけ優しく微笑んだ。

「ええ、そうです。夏がいたのと同じ部屋ですから、覗いてみてください」

彼が左手で木製の扉を示すと、訪問客はぱつと扉に駆け寄った。今度は、扉に近付いても、以前のような熱気が訪問客を包むことはなかった。訪問客は一瞬目を伏せ、そして、以前に夏を覗いた小窓から、部屋の中を覗き込んだ。



世界の終わり

麻績

今日は、最後の日だ。

私たちは眠りに就く。今日限りで、私たちの活動は停止する。それを知っているのは私だけ。クラスのみんなも、お母さんもお父さんも、君も、今日が最後だって微塵^{みじん}も思っていないのだろう。むしろ、知らないほうが良いかもしれない。

終わりが来るのは、昼の一時。お昼休憩の時間だ。平日なので、私はいつもどおり学校に行く。お父さんは休みだった。出る間際にお母さんとお父さんの顔をじつと見たら、不思議そうな顔をされたあと「遅刻するよ」と急かされた。いつもは言わない「いつてきます」を、この日だけは言った。「ただいまは、言えないけど。

昨日や一昨日と同じように授業を受けた。ひとつだけ普段と違うことを上げるとしたら、四時間目の数学のときに目がパッチリ冴^さえていたことくらいだ。眠たい授業も、これで最後だと思うと目が覚めた。

お昼ご飯は、君と一緒に屋上で食べた。一時まで、あと十分程度。もうすぐ終わるのだと思うと、昨日のバラエティの名場面を語る君の声も姿も笑顔も、屋上からの景色も、空気も、校舎から聞こえるざわめきも、全てが特別に思えてくる。

君はたまにパンをかじっては、楽しそうに話し続ける。私はお弁当の卵焼きを食べながら、それに相槌^{あいづち}を打った。お弁当に目を落とすフリをして腕時計を見ると、十二時五十九分。もう、終わりの一歩手前。

そろそろだ。私はじつと君を見つめた。君は一瞬キョトンとしてから、満面の笑顔を浮かべる。私は君に、

出来るだけの笑顔を返した。

カチ、と分針が動いた。

霧の子

麻績

「いらつしやい」

昼時の騒がしさも消えて、微睡まどろみのような静けさが残る店内に、マスターの低い声が響いた。入口のほうを振り返ると、扉を開けて入ってくる少年が見えた。

少年は常連らしかった。少年が席に着くと、マスターが「いつものかい」と訪ね、少年はウンと返事をした。マスターは少し口元を緩めて頷うなずき、店の奥に消えていった。

マスターの姿を見送ってから、少年はこちらに顔を向けた。ルビーのようにキラキラ光る瞳からは、いかにも興味津津、というのが伝わってくる。こんにちは、と挨拶をすると、ニツコリ笑って同じ言葉を返された。

「きみは、だれ？」

という少年の問いに、短く

「魔女さ」

と答える。少年はエツ、と目を丸くした。

「男でしょ？　なのに、魔女なの？」

「性別なんて関係ないよ。僕は魔女。そういう存在なのさ」

少年は眉を寄せる。いまひとつ理解できていない顔だ。

マスターが現れて、少年の前にグラスとストローを置いた。グラスに満たされた濁った炭酸には、檸檬れもんが浮かんでいた。ぱつと笑顔に戻った少年はマスターに「ありがとう」と言つて、ストローをグラスにさした。マスター

は、どういたしましたと、と表情を和らげ、また店の奥に戻っていった。

「魔女っていうのは長生きするものだって、本で読んだよ。魔女さんも？」

「まあ、少なくとも君よりかは長く生きていると思うね」

「何年くらい？」

「五百年くらいかな」

少年はすごい、と息を飲んだ。が、すぐに首を傾^{かし}げた。

「でも魔女さん、見た目はおれと同じくらいの年に見えるよ」

少年の言葉に、確かにね、と返す。どう見ても、幾星霜を生きた魔女だとは到底思えない。これは、よく言われることだった。

「見た目と実年齢が必ずしも合っている必要はないんだよ。僕は僕なんだから、好きな姿で生きているのさ」

「……ふうん」

少年のその表情からは、納得していない様子が、ありありと見て取れる。少年にはまだ理解しがたい話だっただろうか。

少年は、しばらくストローでグラスをかき混ぜながら考えていたようだったが、ふつと息を吐くと、難しい顔のまま、グラスの中身を一口飲んだ。浮かべられていた檸檬^{れもん}が、グラスの中をぐるぐる回っていた。

「よくわからないや」

「わからなくたって構わないさ」

少年は難しい顔を崩さず「そう」と言った。僕は、僅かに残っていた紅茶を飲み干した。少年はそれきり口を閉ざしてしまった。何か考え事をしているようだった。

窓から外へ目を向ける。先程より濃い霧が空間を支配しようと手を伸ばし、窓に切り取られた視界を白く濁らせていた。

店内には沈黙が、霧のように漂っていた。空になったカップを見て、マスターが再び注いでくれた紅茶に、今度は檸檬れもんを浮かべる。一口飲むと、爽やかな酸味が口に広がった。

「魔女さん」

沈黙を裂くように、少年が口を開いた。僕は少年のほうを向いた。少年のグラスは中身が半分くらいになっていて、果肉のほぐれかけた檸檬れもんが、ストローで底のほうに押し付けられていた。少年は、グラスに視線を落とし、たままで、言葉を続けた。

「魔女さんは、自分がどこから来たのか、知ってる？」

少年の問いに、僕は口を噤つぶんでしまった。どう答えるべきか、考えてしまう。少しの無言のあとで僕は

「実は、知らないんだよ」

と答えた。髪の毛の隙間から、少年が目を伏せるのが垣間見えた。

「……おれも、自分がどこから来たか知らない」

少年は、そう吐き出した。僕の頭に、ある単語が浮かんだ。

「……霧の子」

僕がそれを口にとると、少年は首を縦に振った。

僕もそうだったんだ、と呟つぶやくと、少年は顔を上げた。紅い瞳あかが、ユラリユラリと揺れていた。あのときの僕も、こんな目をしていたに違いない。大丈夫と微笑むあの人が、脳裏に浮かんだ。

「魔女さんは、それで、何とも思わなかった？」

少年は継すがるような目で僕を見た。僕は問いを返した。

「君は、どう思ってる？」

少年は「おれは」と呟つぶやいて口を開いたまま黙り込んだ。僕は少年が再び声を出すまで、待った。やがて、少年がたどたどしく口を動かした。

「おれは、自分がどこのだれか分からないから、自分の存在があやふやだと思ってるんだ」

僕は思わず、ああ、と漏らした。

「不安……？」

僕がそう言うのと、少年の瞳が少しばかり見開かれる。

「よくわかったね。あ、もしや魔法？」

「さあ、どうだろう。ただ僕は目が良くてね。霧があってもなくても関係ないくらい、よく見えるのさ」

少年の驚きに、僕は冗談めいた返答をした。

「ふうん。それじゃ、おれがどこのだれか、わからないのは、霧のせいで見えないせいなのかな」

少年は窓の外に目をやった。窓の外は、立ち込めた霧で白く染まっていた。あれでは、一寸先も見えないほど視界は不明瞭だろう。僕は、「そうかもしれないな」と返した。

「でも君も霧の子だろ、よく目を凝らせば見えるはずさ」

僕は口角を上げて笑みを浮かべた。少年は訝いぶかしげに

「なにが見えるの？」

と訊きいた。僕は少し考えて、

「それは人それぞれってやつさ」

そう答えた。言いながら、その通りだろうと思った。僕に見えて少年に見えないものがあるだろうし、逆に、僕には見えなかったが少年には見えるものだってあるだろう。少年の目に映るものは周囲の人々と同じかもしれ

ないし、全く違うかもしれない。少年には少年の世界がある、はずだ。

少年が、言うか言うまいか迷うように、口を開いた。

「……魔女さんは、なにが見えたの？」

「それは、内緒」

僕はそこで言葉を切つて、

「でも、ひとつ君に言えることは、そうだな。大切なことは、自分がどこから来たかじゃなくて、これからどこへ行くか、だと思ふのさ。君が何者であるか考えることは、歩きながらも出来るだらう？」

と続けた。少年はしばらくの間、僕の言葉を反芻しながらストローで檸檬をつついていたが、やがて何かにたどり着いた様子で、「そうか」と呟いた。

濃い霧が出てこようとしていた。もう数分もすれば、視界は白く染まるに違いない。

小さな鞆かばんを持ち赤いレインコートを身に纏まとった少年が、薄らとかかった霧の向こうから、こちらへ手を振った。僕が少年のほうへ歩いて行くと、少年は「こんにちは」と笑顔を浮かべた。

「ちょっと、遠出してみようと思つてさ」

少年は自分の身なりを見せるように腕を広げた。赤いレインコートは、彼によく似合っている。

「うん、いいんじゃないかな」

僕が微笑ほほえみ返すと、少年は「でしよ」と笑う。が、次の瞬間には、

「でも、大丈夫かな。……おれ、この街のことしか知らないから」

と顔を曇らせた。先程よりいくらか濃くなった霧が、僕と少年の間の空気を濁らせた。

「大丈夫さ。はじめてのことをするときには、みんな同じだ。心配なら、また帰ってくればいい」

「……そうだね」

少年は、ヘラリと顔を綻ばせた。彼は霧の子だ。心配はない。きっと、霧の向こうに何かを見つけるだろう。それは、僕が見たものと同じかもしれないし、全く違うものかもしれない。誰かと同じである必要もない、かといって全く違うものである必要もないのだ。

「……良い旅を」

僕がそう言ったときには、彼の姿は霧に紛れてしまっていた。目を凝らすと、霧の向こうに、今まさに舟に乗り込もうとしている彼が見えた。

ふと、隣にあの人が立っているような気がした。あのとき、僕の背中を押したあの人も、こんな景色を見ていたのだろう。

今はもう傍にいない人を思い出したからか、急に人恋しくなった僕は、家路についた。僕の帰りを待っている人がいる。

◆あとがき

この度は「櫻^{さくら} 2018年秋号」を手を取っていただき、ありがとうございます。内容のほうはいかがでしたか？

私の作品は、前回より落ち着いた世界観の話になったな、と自分では思っています。少しでも心に残る作品があれば、嬉しい^{うれ}いです。

以下、私の書いた作品の解説のようなになります。

「おやすみ」……ギリシア神話のカロンからイメージした作品です。神話のカロンは死者からコインを取り立てたり、舟を死者自ら漕^こがせたりするらしいですが、これに出てくる渡し守はどちらもないので良心的です。

「夏」……今年は、暑すぎて逆に「夏という概念」が恋しくなる夏でした。概念としての季節を閉じ込めてあって、いつでもそこに入ればその季節を感じられる、そんな部屋があったらなあ、と思って書きました。

「世界の終わり」……世界が終わる日の話です。世界が終わったことに気付かなかつたら、それが一番幸せなのかもしれないです。

「霧の子」……コンクールに応募したものの、入賞は逃してしまった作品です。旅立ちのはなし。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。またどこかでお会いしましょう。

追憶の教会

澤^{れい}音^{いん}

その教会はもはや原型をとどめていなかった。

天井は抜け落ち、祭壇も人々が話を聞くために座る席もなくなつてステンドグラスだけがきれいに残されていた。

「……………っ！」

教会の真ん中に体に包帯を巻いてボロボロの服を着て横たわっている青年は目を開けると辺りを見渡し、以上のことを確認しゆつくり体を起こした

「あっ！ようやく気が付いたんだね！」

青年の背後で声がした、振り返つてみると、目に包帯を巻いて上品なワンピースを着た十二歳くらいの少女が大きな椅子に座っていた。

「お兄ちゃん全然目を覚まさないからもう起きないんじゃないかって心配してたんだよ」
起きたばかりで頭が働かない青年をよそに少女は一人話し続けた。

「……でもよかった！一人じゃどうしようかと思つたけど、お兄ちゃん元気そうだし——」

「ちよつといいか！」

青年は少女の独り言を遮ると少女はなあに？、と聞いて話すのをやめた。

「さつきから普通にしゃべっているけど、君は僕と会つたことあるのかい？……それに僕は気が付いたらここにいたわけだけど、君も同じなのか？」

青年の問いに少女は頷いた。

「そうだよ！ わたしもお兄ちゃんといっしょにここに連れてこられたんだ！……でも、お兄ちゃんと会ったのは今日がはじめてだよ」

青年は初対面なのに自分に話しかけてくれる少女が不思議だった。

「…君はどうして僕に話しかけてくれるの？」

少女は笑顔で答えた。

「だってお兄ちゃん、悪そうな人じゃなさそうだから！」

悪そうな人じゃなさそう、慣れない言葉に青年はもどかしそうに俯いた。

「……よく見るとお兄ちゃん、体のあちこちにほうたい巻いてるね、いたいの？どこかけがでもしたの？」

少女は話をぴたりと止めると青年の体に巻かれた包帯を心配し始めた。

「ああ……別に大したことないよ。それよりも、君だつて目に包帯を巻いているじゃないか！そっちの方がよっぽど心配だよ、それに包帯を巻いているのに僕の包帯の事がわかるってことは、君は前が見えているの？さっきから椅子に座っているけど——」

青年は話している途中に少女が座っている椅子をよく見ると大小の車輪が椅子の前後についているのがわかった。

「……まさか、さっきから君が座っているのって車いすなのか！？」

驚いている青年と違って少女は笑顔で答えた。

「そうだよ！ 前事故に遭つて目と足が使えなくなつたんだ。……あ、でも目は完全に見えなくなつたわけじゃないよ。……うーん、えっとね、真つ黒な背景にお兄ちゃんの顔とかの輪郭とかが白い線で描かれているように見えるんだ。」

少女は大したことない、といった様子だった。

「ところで、お兄ちゃんはこちらはどうするの？」

「えっ？ どうするって……？」

青年は少女の質問の意味が分からないでいると

「どうするものにも、……お兄ちゃんここから出ないの？」

さつきから少女にばかり気を取られていたが、青年は目を覚ますまで自分がどこにいたのかを覚えていなかった。かといつてずっとこの教会にいたわけでもない。

「……………」そういえば僕はここに来る前にどこにいたんだ？ ……だめだ、ここに連れてこられるまでの記憶がない……。」

少女はとても驚いた様子だった。

「ええっ！？ お兄ちゃん『きおくそうしつ』なの！？」

「いや、記憶喪失とまではいかなかな……？ 自分が何者かも覚えているし、ただここに来る前にどこにいたのかだけ思い出せないんだ……。」

そうなの？ と少女は首をかしげた。

思い出そうとしても青年の頭の中の記憶の一部に黒い幕が下ろされたかのように音も景色も浮かんでこなかった。

「僕はこれからどうすればいいのだろう。……ここから出たところで帰る場所もわからない。」

下を向いてしまった青年を少女は包帯越しにじつと見るとしばらくしてあつ、と声を出した。

「じゃあさ、じゃあさ！ お兄ちゃんも私も一緒にここを出ようよ！」

それを聞いて青年は顔を上げる。

「……えっ？君と？」

少女はうなずく。

「そうだよ！ わたしはここから出てみようかなって思っているんだ、よくわからない場所にずっといてもなにも変わらないし、……それにわたしだと車いすを押せないから、だれかの助けがないと動けないんだよね。」

「……それなら、僕は君についていくよ。君の車いすを押せばいいんだよね、どこに行くの？」

少女はありがとう、と言うと一番端っこにあるドアを指さした。青年は少女の後ろに回ると車いすを押した。

「お兄ちゃんやさしいね〜！ こうして誰かに車いすを押してもらったのは久しぶりだね〜」

嬉しうれそうに話す少女に青年は疑問を抱いた。

「……でも、誰かに押してもらわないと動けないんだよね？今までどうしていたの？」

「いつもはあまり動かなくてよかったから気にしてなかったな……。たまにお父さんとかお母さんが押してくれただけで二人ともけっこう雑だったんだよね……。」

青年はそうか、とだけ返事をする。これ以上のことを聞くのをやめた。

「そんなことよりもさっ！ 早くドアを開けようよ！」

ドアの前まで来ると少女はそう言ってゆっくりドアを開けた。

ドアの向こうは教会と同じく天井が抜け落ち、日の光に照らされていた。廊下が左右にどこまでも続いていていかにもはいきよ廃墟といった所だった。

「本当にここはどこなんだ……。僕たちを連れてきたやつらは一体何を考えているんだ……？」

辺りを見ても自分たち以外の人が立ち入った様子はなかった。

「ねー！ ねー！ お兄ちゃん、左の道に行ってみようよ〜！」

少女はまるで迷路で遊んでいるかのように左の道を指差した。なぜ左に進むのかと青年が聞くと少女は勘だ

と答えた。正直そんな安直な考えでいいのかと思ったが青年は少女の言うとおりに車いすを押した。左の道をしばらく歩いていると地響きがした、最初のうちは二人とも気付かなかったが、地響きは次第に大きく、鳴る間隔も短くなっている、まるで巨大な何かが二人めがけて走ってきているようにも思えた。青年が振り返るとその言葉通り、大きな岩でできた人形のようなものすごいスピードで迫ってくる、やがて少女の耳に鈍い音と青年のえづく声が聞こえてくるとさっきまで後ろで自分の車いすを押していた青年が数メートル先に転がっていった。

「お兄ちゃん！！」

少女が呼びかけても青年は倒れたままぴくりとも動かない。少女の目に映る白いかたまりが青年の流している血だということに気付くのに時間はかからなかった。

「お兄ちゃん、しっかりしてお兄ちゃんっ！！」

青年に近寄ることもできない少女はひたすら声をかけた。その間に岩の人形は少女の目の前まで迫っていた。

「……あっ！！」

人形がごつごつした岩の腕を振り上げる。少女も青年と同じ目に合うと悟り、顔を伏せた。物と物がぶつかり合うすさまじい音がする。しかし、少女の体には何の衝撃も感じなかった。

「……………」

少女が顔を上げるとそこにはもう一体、岩の人形が少女の前に立ちはだかっていた。

「…えっ？」

立ちはだかっていた人形は攻撃を受け止めるとすかさず腕で人形を押し出し、腕を振り上げ人形を殴った。壁を突き破り殴られた人形は威力を受け止めきれず倒れたまま起き上がることはなかった。

少女は状況について行けず、ただ見ていただけだったがはっと我に返り、青年に目を向けた。青年は倒れた

まま起き上がっていない。

人形は少女の方に顔を向けた。今度こそ攻撃を受けるのではないかと少女が震えているとそれに気づいた人形は腕を使って壁にガリガリと何かを書きだした。

「ミ　　カ　　タ」

ガタガタした字とても読みづらかったが確かにそう書いてあった。

「ミカタ……？　　つてことはさっきのつてわたしをたすけてくれたの？」

少女の問いかけに人形はゆっくりうなず頷いた。

「そうだったんだね　！　ありがとう！！」

さっきとは一変少女の顔に笑顔が戻る。人形は自分の腕を伸ばすと少女を車いすごと持ち上げた。軽々と車いすと少女を運ぶと青年の目の前に降ろした。少女はもう一度ありがとうと人形に言う上半身を曲げて青年をゆすった。

「お兄ちゃん……。」

少女がぽつりと呼んだ声に青年はうう……とかすかに声を漏らした。体が少し動きゆつくりと目が開く。

「……あ、れ……僕は……。」

青年の目が完全に開くと体を起こした。

「生きててよかった……。」

少女が安堵あんどの声を漏らすと青年はすまないとあやまる。

「心配してくれてありがとう……でももう大丈夫だよ、僕が死ぬことはないと思うから……。」

少女は青年の言っている事がわからず、どういうこと？　と聞き返した。青年は少し黙ると意を決して自分の右腕を見せる、右腕はさっき吹き飛ばされた怪我けがで異常なほどの血を出している、おそらく少女の目に映った

血はこの右腕からながれていたものであろう。

「お兄ちゃん！！血が！早く手当を——」

「大丈夫、大丈夫だから！」

青年が少女の心配する声を遮る、すると青年の腕の傷がみるみるふさがっていき、しまいには血も傷口もきれいに消えていた。

「……えっ？傷が治った……」

少女がとても驚いた様子で傷口があつたところを見る。青年は無言でうなずいた。

「……さつき攻撃を受けたときに頭を打ったみたいで、おかげで思ひだしたよ。……僕が不死身だつてこと。そのせいで周りから気味悪がられていたことも……。」

少女は黙ったまま青年を見ている。

「……やっぱり君も怖くなつたよね、ごめんね。」

「そんなことないよ！！！」

あやまる青年に少女は声を上げた。

「こわくなんかないよ！ お兄ちゃんが不死身だからつてわたしはお兄ちゃんのこときらいなんかない！」
青年は驚く。

「……本当？僕の事こわくないのかい？」

少女は^{うなず}頷く。

「もちろんだよ！！……だからお兄ちゃんもわたしのとききらいにならないで？」

今まで醜い罵倒しか浴びてこなかった青年に少女の言葉がつよく刺さる。ふと青年の目に涙が流れた。

「……お兄ちゃん？ 泣いてるの？ 本当はわたしのとききらいだった！？」

少女の言葉に青年は涙を拭きながら首を横に振った。

「嬉しいんだ、僕人にやさしくされたことなかったから……。ありがとう！僕も君の事きらいになんてならないよ。」

青年の嬉しそうな表情に少女も笑顔を見せる。人形はそんな二人を見守っていた。

「ところで……その大きい岩みたいなやつはなんなんだい？」

青年が人形を指差す。

「わたしたちの味方だつて！わたしをお兄ちゃんの所まで運んでくれたし、助けてくれたんだよ！」

少女が説明すると青年はよろしくと人形に挨拶をした、挨拶に合わせて人形もうなずく。

「この子、きつとゴーレムだと思う！岩と魔法の力でできたお人形。わたし本で読んだことがあるの！！：

…あつ！なまえ『ゴーちゃん』がいいと思う！」

少女はまたさっきのように独り言を話し始めた。

「どう思う！？お兄ちゃん！『ゴーちゃん』ってかわいいでしょ？」

「えっ？あ、う、うん。いいんじゃないかな？」

青年は慌てながらも少女に賛成した。ゴーちゃんは二人をじつと見ると二人を案内するかのように道を歩きだした。

「お兄ちゃん、ゴーちゃんが案内してくれるみたいだよ。追いかけてよう！」

青年は少女の車いすを押してゴーちゃんを追いかけた。

——しばらくおなじような廊下を歩いているとやがて目の前に一つのドアが現れた。ほかに行く当てがない二人は何のためらいもなくドアを開けた。

……ドアの向こうはベッドが横並びにいくつも並べられた病室だった。人は二人以外だれもおらず、窓からは

うす気味悪い光がさしていた。

「ここは教会のはずなのに、どうして病室が？」

青年が疑問に思っていると少女が小刻みに震えていたのに気が付く。

「……大丈夫？」

青年が心配して声を呼びかけるが少女の耳には全く入っていない様子だった。少女は体を震わせ、呼吸が荒くなっていった。

「し、しっかりして！……大丈夫！？」

「あ……う……う……つき……」

少女は何かをつぶやいているがその声はとても小さく聞き取れないものだった。青年は耳を少女の近くに傾ける。

「……うそ、つき……うそつき……」

少女は少しずつ大きくなり、最後には部屋全体に響きわたるほどの大きな声で叫んだ。

「みんなのうそつき！！　目も足もなおるって言っていたのに、ちっともなおらない！！　みんなしてわたしにうそついてたんだ！！　もういや！　みんななんてだいつきらい！　きらいきらいきらいきらいきらいきらいきらいきらい！！！！！！」

少女は自分の耳をふさいでただひたすら「きらい」と連呼し続けた。すると少女の周りから白い布のようなものが地面から現れた。白い布は今にも少女に覆いかぶさろうとしている。その光景を見ていた青年の頭にふとある思いが横切った、「このままだと少女はこの白い布に連れ去られてしまう」と。どうすることもできない青年はとつさに少女の手を取った。白い布の動きが止まる。しかし少女の連呼は止まらなかった。

「大丈夫だよ！……大丈夫！　君の目も足もきつと治るから！」

青年がそう叫ぶと少女の動きが止まった。

「……みんなそう言ってたけど、いつまでたってもなおらないの！！……どうせこのままなんだよ。みんなうそつきだったんだ……。」

涙を流す少女に白い布もまた動き始めた、さっきよりも動きは早く少女を覆ってしまいそうだった。

「……うそつきなんかじゃない！」

青年は声を上げた。

「少しづつだけど君の目も足もよくなってるはずだよ！ そんなすぐに治さなくなっちゃっていいんだよ、たしかに不自由かもしれないけどその時は僕が支える！」

その言葉に少女の涙が止まった。

「……お兄ちゃんが？」

青年は強くうなずいた。

「だからゆっくり治していこう！ 焦る必要なんてない！ 僕がそばにいるから！」

少女の顔が明るくなる。

「うん！ わたしもがんばる！ もう逃げたりなんかしない！」

少女がはつきりそう言う白い布の動きが止まり地面にぽとりと落ち消え去った。病室全体がゆがみいつしかそこは病室から大きなパイプオルガンのある教会になっていた。パイプオルガンには誰かが座っており幻想的でゆったりとした音楽が流れていた。

「わたし……この曲知って……る……。」

演奏を聴いていた少女が突然眠りだした。

「……よくここまでたどり着くことができましたね！」

青年が少女を起こそうとしているとオルガンの演奏がぴたりと止む^や。演奏していた若い男性は演奏台から軽

々と飛び降り、二人の前に現れた。

「彼女ならじきに目を覚まします、気にすることはありません。」

そういつて少女の目に巻きつけられた包帯を取った。

「……もしかして、僕たちをここに連れてきたのは君なのか？」

青年が男性に問いかけると男性は少し悩んでから答えた。

「半分あっていますが、半分間違っていますね。ここに来るには君たちの意思も必要になってきますから。」

青年はすかさずどういことだと聞き返す。

「……ここは『追憶の教会』です。そして私はこの教会の神父。ここには過去の出来事や思いにとらわれた人たちが変わりたいという意思を持った時に流れ着く場所。ここから出るには過去の出来事を振り切らないといけないのです。」

神父が話していると後ろで立っていたゴーちゃんが神父の後ろまで移動した。

「……でも、過去を振り切ることができない人もいる。その人は教会をさまよった末にこの子と同じ見た目、つまりゴーレムとなって新たにここに来る人の邪魔をするのです。まあ、そんなことさせないようにこの子に常に見張ってもらっていたのですが。」

そういつて神父はゴーちゃんを撫^なでる。

「つまり、この子が病室にいたときに我を忘れていたり、白い布が覆いかぶさろうとしていたのもすべて過去の記憶から来ているということか？」

青年がそう言うのと神父はその通り、と答え、一冊の本を取り出した。

「彼女は事故により目と足が不自由になってしまった。周りに迷惑をかけまいと治すことに焦り、結果としてここに行き着いてしまったようです。……きつと病室で白い布に完全に覆われていたら過去を振り払うことはでき

なかったでしょうね。」

本のページをめくりながら神父が言った。そして今度は青年を指差す。

「そして、記憶が抜け落ちている君がなぜここに來たのか。……それは君が彼女を助けるために必要な存在だったから。不死身だから周りから避けられてきた君に与えられた使命だったのです。実際に君は彼女を救った、君は君の使命を果たしました。」

神父がここまで話すと少女が目を覺ました。

「さあ、君たちは晴れて自由です！ もう君たちを阻むものもあらわれることはないでしょう。これからをどうするのかは君たち自身で決めるのです。」

神父がそう言うのと二人の目の前にドアが現れる。

「お兄ちゃん、これってわたしたち外に出られるってことだよね？」

いつの間にか少女は目を覺ましていた。眠っていたためほとんどのことを聞かされていない様子で青年に尋ねる。

「ああ……そうだと思う。」

青年がそう言うのと少女はそつかと呟いた。

「わたし、お兄ちゃんとならどこにでも行けそうな気がする。……わたし、目が見えるようになったの。久しぶりに色が見えるようになって、なんだかわたしの中にあつた何かが消えたような気がする。……それくらい世界がきれいに見えるの。どうしてかはわからないけどお兄ちゃんのおかげだって強く感じる。お兄ちゃんだったら足だってきつとすぐに動かせるようになると思うんだ……。」

そう言つて笑う少女に青年も強くなずく。

「僕もそう思う！ 君となら僕のなくした記憶よりももっと楽しくなるような気がする。……ドアを開けよう、

これから先何が起こるかわからないけど、ここから出ないには何も始まらないからね。」
青年は車いすを押したドアに近づいた少女はドアを思いっきりあけた。

これから先、何が待ち受けているかはわからない。この二人にも、そして神でさえも知らないだろう……。だが、この二人はドアの向こうにあるかもわからない明るい未来に希望を抱き進まずにはいられなかった。

◆あきがき

ここまで読んでくださりありがとうございました！！！！！！！！

去年私がカモノハシの話を書いたのですが、そんな感じの不思議な世界観が書きたい！ と思いこの話を書いてみました。言わせたいことはほとんどキャラに言わせることができたので結構満足しています！ 一つだけあるとすれば、青年の抜け落ちた記憶と言うのは不死身と言うことを悪用されサンドバッグのような扱いをされていた頃の記憶です。

青年の服がぼろぼろで体に包帯を巻いていたのはそのせいです。

久々に小説を書いた気がするのでひょっとしなくてもぐだぐだだったたりしているのでそこは温かい目で見守ってくださいとありがたいです。

それでは、首がだいぶ痛いので今回はここまでにしようと思います。

本当にありがとうございました！！！！！！！！

詩
四
編

ふうせんと空

ふわりふわりと空を飛ぶ

僕の頭はがらんどろ

ふわりふわりと宙を舞う

僕の心はがらんどろ

ゆるりゆるりと一人旅

何も感じず一人旅

ゆるりゆるりと落ちていく

何も感じず落ちていく

僕は風船ゆるふわり

壊れやすいよゆるふわり

ある日女の子 僕の元

僕を掴^{つか}んで 逃げてった

あの女の子の名前はなんだったかな

もう思い出せない

僕の頭はがらんどろ

そらのおさんぽ

ふんわりふわふわおそらに乗って

ゆったりゆらゆらそらのおさんぽ

わたがしみたいと言われるけれど

食べてもおいしくないよ水だもの

ふんわりふわふわ風にはこばれて

ゆったりゆらゆらリズムに乗って

とりさんとはなかよしこよし

ふうせんさん今日もこんにちは

ふんわりふわふわ

ゆったりゆらゆら

ふんわりふわふわ

ゆったりゆらゆら

まっかっか

はらはらおちる

どこまでおちる

赤い紅い^{あか}私たちは 道に落ちるとまっかな絨毯^{じゅうたん}

それとも まっかな血だまり？

ここを歩く人たちは みんな私たちを見ない

綺麗^{きれい}だね 綺麗^{きれい}だね

みんな上ばかり 私たちなんて見てくれない

きれいだね 綺麗^{きれい}だね

$$x \wedge x \wedge$$

$$\wedge x \wedge x \wedge$$

$$x \wedge x \wedge$$

$$\wedge x \wedge x \wedge$$

あき

ぽと また一つ二つ落ちていく

ぽと 茶色い茶色いぽーるが落ちていく

ぽーるを見つけて君が言う

「あの中に入ってみたいな」

そう笑って君が言う

ぐちゃ 僕の目の前

ぐちゃ 君がトビチル

子供が笑ってる

ぼーるを拾って笑ってる

いたいね イタイネ

とげのついたぼーるを拾って言っている

イタイヨ いたいよ

もういないはずの君も言っている

ぼとり ぼとり 落ちている

ぼとり ぼとり 地面に落ちている

◆あとがき

どうもお久しぶりです。蒼そうと申します。今回は詩を何編か書かせていただきました。去年から詩は書いてはいたのですが、どうも自信が持てずここまで温めていたので少し季節感があやふやかもしれません。そこはご了承ください。

さて、今回の詩のタイトルは「ふうせんと空」「そらのおさんぽ」「まっかつか」「あき」だっと思いましたが、お察しのとおり後者の二篇へんは今年書いたものです。そして、前者の二篇へんが去年書いたものとなっております。この詩は書いた年は違えど共通点があります。それが、すべての語り手が、何かしらのもの目線ということ。例えば、「ふうせんと空」は、空を飛んでいる風船目線となっております。タイトルのまんまなのはお許し下さい。そして、「そらのおさんぽ」は雲目線、「まっかつか」は地面に落ちた紅葉目線、「あき」は、くりの中に入っているクリシギゾウムシ、という虫目線で書かせていただきました。因ちなみに、クリシギゾウムシは食べると美味おいしいらしいですね。炒いつたり、茹ゆでてみるのが素朴な調理法でおすすめです。まあ、私は食べたことはありませんが。

ここからは、私が書いた詩について軽く解説していこうと思います。

まず最初に「ふうせんと空」ですが、これは詩のことばそのままです。ふうせんが空を飛んでいて、その飛んでいる理由が女の子に手を離された、といった感じです。因ちなみにがらんどというのはなに何もなく広くしている、みたいな意味です。

次に「そらのおさんぽ」ですが、これも詩のことばのままです。雲が空を漂う様子を書いてみました。ただただ雲が漂うだけの内容です。文中の「ふうせんさん」は「ふうせんと空」の風船をイメージしたわけではないで

すが、なんとなくそれっぽいので同一人物、いや同一物でオーケーです。

次に今年書いた「まっかつか」ですが、ぱっと思いついたただけなので文面がめちゃくちゃですが、一応紅葉です。皆さんは紅葉を見るときどこを見ますか？ 殆ど^{ほとんど}の人は上に広がっている紅葉を見るはずです。では、下に落ちている紅葉はどんな気持ちなんでしょうね。そんな事を思いながら書きました。

次に「あき」ですが、これも今年に書きました。この詩は虫目線なのですが、虫から見たら人間なんて恐怖の塊だと思います。大きくて、大きくて、踏まれたらひとたまりもありませんでしょうね。皆さん、話していた友人が突然なにか大きいものに踏み潰され、いきなり消えたりしたら、どうしますか？ 足元には十分お気をつけください。その虫たちもまた、私たちと同じ「生きて」いるのです。

では、このあたりであとがきを終わろうと思います。ここまで読んでいただきありがとうございます。また、次の^{さくら}桜で会いましょう。

◇著作者

山陽女学園高等部 文芸同好会

三年生 麻績（部長）

二年生 濤音

〃 蒼

◇表紙絵・挿絵 麻績

山陽女学園文芸同好会誌 通算二十七号

櫻

二〇一八 秋号

平成三〇年一月三日 発行

著作・編集・製本

山陽女学園高等部

文芸同好会